国際交流雑感

正会員 高木 幹雄[†]

1. ま え が き

国際交流ノートが終るので、何か書くようにとの依頼があり、今までの掲載原稿を改めて拝見したところ非常によく企画されているのに感心し、今更付け加えることもないと感じました。読んだものは懐かしく思ひ出し、忙しさに紛れて見落としてしまったものには新たな感銘を受け、原稿を書くのをそっちのけにして読ませて頂きました。本学会の出版委員長と致しましては、これを纏めて小冊子として、会員各位の座右の書にしたい感じが致します。講演の仕方、国際会議の開き方等は、出版が難しければ、マニュアルとして、最近新設(試行中)されたテレビジョン学会のホームページに入れておくと思います。

国際交流には、このシリーズで紹介されているように、いろいろな側面があります。その中で、経験した外国滞在、国際会議、共同研究について述べたいと思います。

2. アメリカ滞在

1971年から1972年にかけて1年弱、カリフォルニア大学(サンタバーバラ)(UCSB)に滞在しました。当時は、サンタバーバラといっても知っている人もなく、たまたま、第二次世界大戦中にサンタバーバラ沖の海戦というのがあったことを知っている人は、対日感情が悪いのではないかと心配してくれました。しかしそれも、潜水艦が近付き、大砲を打って、レストランの屋根が壊れた程度のものであったようで、終戦後、その艦長さんが街をパレードしたと聞きました。サンタバーバラの住人は、そこに住んでいることを誇りにしており、我々がサンタバーバラを知らなかったのを

意外に思ったようでした。後日、アメリカ人と話していて、何処に住んだかと聞かれ、サンタバーバラと答えると羨ましがられました。気候も治安も良く、引退したらサンタバーバラに住むのが夢のようです。そのために、町は老人だらけで静かですが、活気はなく、生活程度を高く保ち、治安を良くするために、水が少ないことを理由に人口の増加を押さえ、工場の建設はできず、LANDSAT等のセンサを開発しているHughesの子会社Santa Barbara Research Centerのような研究会社が郊外にあるのみです。メキシコ系は先住民なのでおりますが、黒人は空港のポーターとゴミの収集人くらいで、町ではほとんど見かけません。

ゴルフ場、ポロ競技場、private beachのある地域、入口と出口の別れている邸宅、大理石の停留場の付いたケーブルカーのある家等々、自宅を公開するホームツアーに出掛けると、その大きさに驚かされます。このような地域は、所謂WASPの世界で、売る時も次の買い手を周囲の人が認めなければ、売れません。レベルによって住む地域が異なるので、何処に住んでいるかをよく聞かれ、それによって値踏みをされます。

田舎なので、テレビも近くの町の1チャンネルしか映らず、高いアンテナを立てて、ロスアンゼルス電波を受けている家も多くありました。アパートにはケーブルで配信され、料金も市内は掛け放題の電話とほぼ同額の数ドルだったと記憶しています。東京では、ケーブルテレビの必要は特に感じませんが、国が広く、テレビの映りが悪いことが、逆にケーブルテレビの普及に役立っているのかと思います。ニクソンの訪中の実況を見て、国交のなかった国に中継用機材を運んで衛星中継するのには驚きました。また、札幌とミュンヘンのオリンピックも眺めました。

習慣の違いも多少感じました。

例えば、着いた翌日にアパートを見つけておいてくれたWade夫人が、出入りの庭師のトラックを従えて現れ、アパートが家具なし(ただし、冷蔵庫付、洗濯室には洗濯機有)だったので、不用な家具を運んで

[†] 東京大学 生産技術研究所、テレビジョン学会 現会長
 “My Experience in International Information Exchange
 (20); Thoughts of International Information Exchange”
 by Mikio Takagi (Institute of Industrial Science, University of Tokyo, Tokyo)

来てくれ、そしてベッドや食卓等の不足しているものを、新聞広告で見つけておいたという店に、買いに連れて行ってくれました。ただし、先方に着いて値段の交渉になると、それまではいろいろと口を利いてくれたのに、一切口を出しません。こちらは英語ができないのだから、助けてくれないかと思っているのに知らん顔をしています。こちらは江戸っ子、値切るものではないと思っているので、向こうの言い値で買ったところ、後で何で値切らなかったと言われました。

その後でまた、車を買に行きました。車種は大学院学生の手持っている Ford の LTD の 390 立方インチのエンジンで、子供がいるので 2 ドアのを新聞広告で探し、学生に売り手の家に連れて行って貰いました。この時も学生は交渉を手伝ってくれません。敵もさるもので、新聞に 3 件出ていた中で一番安いとか、ラスベガスから給油しないで帰れて燃費も良いとか譲りません。こちらは、学生が相場を知っておく方が良いと言うので、銀行に置いてある年式と走行距離で相場が出ている blue book を見て出掛け、広告の中では一番安い所に行ったのであまり値切れず、50 ドルしか負けて貰えませんでした。その車は、2 年経った中古車ならば、初期故障も終り安定していると思って買ったのですが、トルコンを代えたり、いろいろと故障が出ました。そのたびに、買った値段で充分に日本車や VW の新車を買えたので、同僚には何故日本の車を買わなかったかと冷やかされました。

アメリカの車に乗ることが、アメリカに馴染もうとしている姿勢を示すことになるのではないかと思ったのと、アメリカ文化のシンボルである full size の車を経験してみたかったことによります。この車を処分する時は、大学院の学生のお蔭で楽をしました。帰る日に空港の駐車場に乗り捨てて、鍵を航空会社のカウンタに預けておき、学生が取りに来て、洗車し、新聞広告を出して売ってくれ、小切手を日本に送って来てくれました。予想していたのよりも高く売ってくれたので、お礼をしても、非常に安く車に乗ることができました。これも石油ショック前の良き時代だったのと、サンタバーバラのように安全な田舎町だったからだと思います。

アメリカ人の中で、日本人との付き合いもなく暮らすのも良い経験でした。勿論、良き時代のアメリカでしたし、特に、サンタバーバラの人達は親切でしたが、日本人どうして凭れ合って暮らすよりも、異国で言葉も通じない環境に放り出されるのは、家族の絆を強めることにもなったと思います。家族のある方は、単身赴任せずに家族全員が苦労を共にすることが、重

要だと思います。

当時は、UCSB に日本人はほとんどおらず、現地の日系の人達と知り合いになったのも、住んでから半年以上経って、Art Museum の oriental show で家内が着物や帯を提供し、着付を手伝ってからで、こんなに良い人達が何処に隠れていたのだろうという感じで今も付き合いが続いています。帰国してからたまに訪れる時には、日系人が多い教会を日曜日に訪ねると一網打尽で会うことができ、能率が良いことも発見しました。もっとも、英語のお説教を聞かされたり、知らない賛美歌を歌わされたり、回される筈に献金させられますが、終わってから明るい日差しの中で、クッキーを摘みながら話すのは楽しいものです。

また、アメリカ人の娘が生まれたのも良い経験でした。医者は病院の周りに看護婦一人のオフィスを構えて普段はそこで診察をするとか、お産をするには、病院に行って deposit しておかないと入院させて貰えないとか、大学の保険でお産もカバーされるけれども我々には適用されなかったとか、2 泊 3 日で退院させられるとか（金曜日の早朝に生まれたので、その日の自分と息子のサンドイッチを作るだけで、後は知合いが食事を届けてくれたので、結局、料理は一度もしないで済みました）。さらに、料金の高い病院だったせいか、家に帰ると落着いて食事でもできないだろうと、退院の前夜に夫婦でディナー（蠟燭の明かりでムードはあります）に招待されたり、大勢お見舞いに来ますが成人以外は新生児室に入れて貰えず、ガラス越しに眺めさせられるとか、どんな物をお祝いに持って来てそれに対するお返しとしてベビーシャワーというパーティを開くとか、本当にいろいろな経験をしました。アメリカというのは面白い国です。

その娘がアメリカに留学するというので、ビザを貰いに大使館に行ったところ、サンタバーバラ生まれであることがわかり、記念に取った昔のパスポートを持って来いということから始まり、本人がアメリカ国籍は要らないというのに、二三度呼出されて説得され、無理やりパスポートを発行して寄越しました。独善的な押付けというか、中華思想なのか、偉大な田舎者なのか、アメリカ人であることを返上するなんて信じられないようです。お蔭で外国人扱いされず、アメリカ人として扱われ苦労もしたようですが、日本語を外国語として楽々と単位を取るというメリットもあったようです。

UCSB は UC の中でも新しく、今では半導体や地物理学の COE となって多少名も知られていますが、当時はできたばかりで、full professor は東部や西部の

有名大学から連れて来てやっと陣容が整った所でした。tenureのある連中は、ここの生活を楽しんでいますが、若い連中は入れ代わっており、アメリカの階層社会の厳しい面がわかりました。キャンパスは、海に突き出している形となっており、弓形となった海岸はサーフィンを楽しむ学生が一年中いました。

3. 国際会議

アメリカには、国際会議にもいろいろな形態があります。人数とトピックを限る日米セミナーのようなもの、招待講演のみのシンポジウム、公募で行うもの等、規模もさまざまです。

3.1 日米セミナー

日米セミナーは、テーマを決めて各国10名程度のメンバーで申請します。シーンアナリシスと物体認識(73)、医用画像処理(75)、リモートセンシング(76)、実時間イメージングと画像処理アーキテクチャ(78)、海色(93)に出席しましたが、両国から提案して採択される必要があります、熱心に進める人があるかどうかが鍵となります。

一員として参加するのは、すべてお膳立てしてくれるので楽ですが、準備から始めると相当な負担となります。ちなみに、画像処理の関係は、70年代にはテーマとして採用されたものの、その後は人の層も厚くなった反面、人を集めて申請するのも億劫となり途絶えています。また、1994年にパターン認識の国際会議があった際に、イスラエルとのコンピュータビジョンのワークショップがあり、今回はこれを日本で開くことになっていますが、これも予算獲得には苦労しているようです。

メンバーを限った小さなセミナーは、お互いに知り合い、議論を充分に行うには非常に良い機会ですが、申請したり、準備したりする手間が掛かるのが欠点です。

3.2 国際シンポジウム

招待講演のみのシンポジウムを、多次元画像情報処理センターで開いたことがあります。

2月末に開いた国際シンポジウム“Global Environmental Monitoring from Space”で、これは招待状を出して、都合を聞いては、プログラムを組み、旅費を予算内に納める手間が大変でした。今はFAXとe-mailが使えるので、楽になってはいますが、年末年始の休暇が欧米とずれているので、追込みの連絡をするために、結局休みはなくなりました。また、資金が文部省と生研から出ているために、その会計の仕分けや、文部省の規定では近くのホテルに泊められないの

で補助するとか、航空運賃も正規運賃で見積もったのを削られたので安いチケット探しをするなど、手間が掛かります。日本発券と現地発券の価格の差、現地の格安切符の安さ、国によって入手のしやすさが違うこと(イタリアのような所は不便)等、いろいろと勉強になりました。衛星データの処理や、アーカイブを行う衛星データセンターを、ネットワークを用いて実現することを会議のテーマとしていたために、講演もWWWを使って、アメリカ、ドイツ、イタリア、韓国、台湾のセンターを呼び出しながらデモを交えて行いましたが、世界中を瞬時にアクセスできたのが、印象的でした。また、会場には10台近い端末を用意し、参加者が自由に利用できるようにもしました。未だ、研究室のホームページに残っていますので、興味のある方はご覧下さい(<http://www.tkl.iis.u-tokyo.ac.jp/SatIAN/>)。

また、多くの原稿をネットワークで受取り、カラー写真のみがDHLで送られてきました。中には、MS-WORDでカラーも含めて送られてきたものもあり、印象に残っています。

月曜に締切り、火曜に目次を作り、水曜に印刷に廻して、土曜には300ページ近い論文集ができました。

3.3 IGARSS'93

大きな国際会議としては、93年の8月にIGARSS'93(International Symposium on Geoscience and Remote Sensing)を、工学院大学をお借りして開きました。これは、IEEEのGRS-Sが毎年開くもので、隔年に米国の外で開かれます。540の論文を、101セッションで行い(分野が広いので、会場が沢山必要でした)、38ヵ国から615名の参加があり、日本からは267名(43%)で、日本人の方が外国人より少なく、アジア諸国、ケニア、エジプト、サウジアラビア、ウガンダ等、初参加の国が多く、初めてアジアで開いた意義もありました。国際会議は、原則として寄付なしで行いたいと思っていましたが、GRS-SからはTransactionのIGARSS特集号に1.5万ドルと利益1.5万ドルを出して欲しいと言われ、齋藤成文先生に組織委員長を、日立製作所の三田勝茂会長に財務委員長をお願い寄付集めに致しました。海外からの招待講演者はありませんでしたが、若い研究者への旅費補助を多数行いました(IGARSS, GRS, URSI, 宇宙開発事業団)。旅費の補助を求める人には、アブストラクトの他にフルペーパーを出して貰い、2人の査読の採点を基に決めました。応募が90もあったので、大変でしたが、喜ばれました。また、旧ソ連からの参加者には、ソロス氏の財団ISFからの補助もあり、そこへ

の申請は主催者が行うので、間に入って大変でしたが、10名近くが来日できました。学生やお金の少ない人をお寺の宿舎に無料で泊めて貰ったり、特に、時間が掛かったのは、ビザで5月に日露の共同研究でペテルスブルクに行っている間です。この時は、大使館や領事館に持参させるビザのための招聘状作りに明け暮れました。ロシアの通信のインフラストラクチャの悪さに悩まされ、また、ビザが発つ日の朝にしか出ないので、ひやひやしたり、外務省の友人に頼んだり、ビザを必要とする人すべての身元保証人になっていたのも、全員無事に帰ってくれてホッとしました。

誰かが日本で開くと口約束したのを引受けさせられた形でしたが、IEEEとの会議は年に3回のAdCom meetingに出て、準備状況、終了までの状況報告を求められるため、その縁で、今もって足が洗えません。

個人的には旅費が掛かるし、会計のシステムは違うし、この時は、東海大学の下田先生を長とする多くの委員会委員の献身的な活動によって円滑に行われましたが、あまりお勧めできません。

3.4 GRS-S AdCom

IEEEのGRS-SのAdComに長らく出させられていると、多少彼我の学会運営の差が目につきます。ソサエティといっても本学会の1研究会に相当するもので、会員は約2,500人、理事会に相当するAdComは、年に3回開かれます。その他に前日に収入源であるシンポジウムの進行状況と終了状況をチェックする会議が、前日の午後に関係者を集めて開かれます。

AdComは朝8時から午後5時過ぎまで、びっちりagendaを組み、各担当理事の報告を中心に精力的に行います。当日の配付資料はできるだけ少なく重要なもののみで、OHPを中心に報告し、後日議事録とともに、OHPのコピーが郵送されます。

10時になると昼食のメニューが回されます。サンドイッチと飲物の簡単な物ですが、アメリカの朝食と同様に細かくチェックして注文するのにはうんざりします。パンは、白かライカ、焼くか焼かないか、中身はステーキかパストラミかツナか等々延々とリストがあり、飲物はコークスプライトか等々続き、現金を徴収し、配達されると、そのままの机でそそくさと食べ、終わればすぐに会議に入ります。この辺は、弁当をつつつきながら会議をする日本と似ていますが、最近問題となっている食糧費に対する考え方は違っているようです。我々は学会の会議で食事が学会持ちで出るのは当然と考えていますが、ホストが出す朝食代わりのドーナツとコーヒーとコーヒープレーク以外の昼食は自前というのは、少し変な感じがします。そ

の代わりAdComの後のAdCom Dinnerはソサエティ持ちで、全員それを楽しみにして、ホストが選んだその土地の由緒あるレストランに嬉々として集まります。こちらは、ニューメキシコのアルバカーキのメキシコ料理なんて言われるとうんざりしますが。

また、AdComメンバーとして中に入っていると、アメリカは階層社会で、AdComのメンバーであることがステータスシンボルとなっているため放したがりません。ヨーロッパでは東洋系というので差別されるフィンランド人を初めて外国人の会長にしたり、メンバーに黒人や女性を入れたり、目眩しをしています。Nomination Committeeがあっても、結構、顔の繋がりですぐにclosedでやっているの、世代交代が余り進んでいません。

会費のほとんどはニュースレターの発行に使われ、論文誌は、図書館の会費（個人の10倍）、ページチャージで賄っています。ページチャージの支払率も50%位で、我々は世界一高い電子情報通信学会の投稿料を全員払いますが、ボランティアとなっているので、払わない連中が結構います。この辺も彼我の考え方の違いで、若い優秀な人が金がないから論文を書けないのは、unfairであるという考えのようです。確かに、日本の大学の場合には、仕事をしてもしなくても所謂校費が貰えますが、アメリカでは、研究費を取って来ないとも払えないので、このような措置も必要かと思えます。しかし、それに便乗して、払えるのに付けが来ても知らん顔をしている連中もいるようで、国民性の違いを感じさせられます。

editorは、電子情報通信学会の英文誌副編集委員長と同様に、年間に250の論文の査読割当てから印刷に廻すまでを一人で行い、年間の予定ページ数に納めるのに苦慮しています。僅かな秘書を雇うお金が出ますが、大学やNASAのような多少自由のきく所でないと勤まらないのは、日本と同じです。

財政的に苦しいので、非常にスリムで、事務局員がいません。conference faciliatorと称して、年間4万ドルでパートタイムの女性を雇っていました。1993年のIGARSSの頃から雇いでしたが、日本では全部自前でやるからその給料を負担するつもりはないと拒否し、また、conference faciliatorと称してAdComの雑用をやらせるのはおかしいと指摘したところ、全員、嫌な顔をしていました。

その費用をIGARSSに回すので、アメリカで開く時は、DMの発送から会場の設定、登録業務まで面倒を見るため、AdComの雑用をさせても、外部に発注するのに比べれば見合うのです。

しかし、アメリカ以外で開く場合には、local arrangement の費用が別に嵩み、下見に行く費用、登録や論文集の印刷をアメリカで行い郵送する費用まで請求されるので見合う筈はありません。そのためフィレンツェの会議は、イタリアの計画がずさんだったのと相俟って、大赤字を出し、その対策に AdCom は頭を抱えています。しかし、これはアメリカの自大主義の付けだと思えます。

3.5 パターン認識国際会議

パターン認識国際会議(ICPR)は、1978年に京都で開かれたことがあります。プログラム委員長であった京都大学の長尾先生と、東北大学の伊藤先生と3人で、論文集を1冊にするために、数日間掛けて削りに削ってプログラムを作りましたが、その後は、2冊となり、最近では4トラックで4冊となっています。

この上部団体であるIAPRの副会長をしている時に、TCの活性化を担当させられました。地域的に離れている委員が集まってTC活動をするのは、本来無理があります。そこで、小さなワークショップを開くことを推奨し、そのためのガイドラインを作りました。

ワークショップを開きたいTCに、予算案付きの提案書を出させて、OKのサインをして、Treasurerに廻すと、3,000ドルの準備資金が借りられ、終了後に返済するというシステムを作りました。当初は踏み倒されたり、返済が遅く、Treasurerに怒られ、日本人ならばきちんとやるのに、欧米人は案外汚いなど頭にきたものです。これも、4年間面倒を見ている間に定着したようです。

3.6 MVA

2年毎に定期的に行っている会議に、MVA(Machine Vision Applications)があります。1988年に、ICPRが北京で開かれることになり、欧米からの参加者を増やすには、会期に隣接して日本でワークショップを開けば、来やすいのではないかと企画を始めました。しかし、北京での開催がイスラエルへのビザの問題でこじれてキャンセルとなってしまったのです。すでに参加募集を出し、論文の応募もあり、借金をして始めましたので、ここで止めては、委員の私財で返済しなければならなくなります。薄水を踏む思いで実行しましたが、結果は大成功でした。その後、すっかり定着し、単独の開催であっても、毎回250人程度の参加者があり、世界的にも知られるようになりました。

この会議は3日間開くので、招待講演者を3人招待しますが、ヨーロッパ20万円、米国15万円で喜んで

来てくれます。この会議では、安い、または、無料の会場で開く(日大会館、日立中研、日電本社、川崎市産業振興会館、慶応大学)、banquet代を別に設定せず参加費に含め若い人がパーティに出やすくする、採択率は低くなるがシングルセッションで開く、no show paperを防ぐため、発表者がpre-registrationしなければ論文集に載せない、等の点に注意し、寄付なしの独立採算を堅持しています。そのため、call for papersの配付、データベースの管理、登録業務、会計、会議の通知と準備等の雑用は、小生の秘書団に負っています。

海外からの参加費の振込も円建て、クレジットカード払いがほとんどです。却って面倒なのが、国内からの銀行振込で、特に、大会社からのものは、何処の銀行から何名分としかわからないので、それを防ぐために振込予定日と銀行を参加申込書に記入して送って貰うのですが、参加する個人を特定するのに秘書が電話で調べたりして手こずられます。

この会議が成功しているのは、実行委員のレベルが高く、意思の疎通が良く、全員が熱心に取り組めることによるものと思います。また、DMのデータベースの整備も重要で、ICPRのパリやミュンヘンの参加者名簿等から始めましたが、大切な財産となっています。

また、今回からe-mailによる情報の配付(imageの利用)、home pageの開設(<http://www.etl.go.jp:8080/etl/gazo/mva96/>)を実施しており、大きな反応があります。

3.7 FENDT

FENDT(Far East Conference on Nondestructive Testing)は、日本非破壊検査協会の会長をしていた時に、韓国と台湾の学会と協定を結びましたので、その縁で、両国の会長にクリスマスカードを書いていたのですが、その時に、折角協定を結んだのだから何か出来ないかと考えたのです。

そして、両国の会長に回り持ちで毎年国際会議を開かないかと提案したところ、同意が得られ、韓国が第1回を引受け、日本、台湾と回っています。

非破壊検査の分野の国際会議は、WCNDT(世界)が4年に1回、APCNDT(アジア、パシフィック)が3年に1回と少ないので、3ヵ国で、小さくとも良いので研究活動を活性化しようとして提案しました。毎年と考えましたが、WCNDTやAPCNDTの年は、そちらに論文が集まらないといけないう国内で反対され、活動の乏しい領域の活性化を計ったのに、その程度のけちな分野なので、それらが無い年に開くことに

なり、定着して来ました。

第1回の時は、日韓のリモートセンシングのシンポジウムと日程を調整したのに、先方の都合で初日が重なり、参りました。

FENDTで開会の挨拶をして、ソウルから大田に行き、午前の最初に予定されていた講演を午後の一番に回して貰い、それを終えてbanquetに間に合うべくソウルに戻りましたが、渋滞に巻き込まれ、銘版に作られた感謝状の授与式には間に合わず、翌朝は一番のバスで大田に行くという散々な目に合いました。

会長をしている間に、韓国、台湾、アメリカの学会と協定を結びましたが、いずれの場合も他の会議の帰途に、ソウルへはヨーロッパからの、台北へはアメリカからの直行便で行きました。いずれも日本に真っ直ぐ帰ると寄り道をして帰るのも旅費は同じなので、サインのためだけに行っても、学会に旅費が掛からないようにしました。また、宿泊費も先方が持つというのを無理やりこちらで払い、後腐れがないようにしました。来て貰ったので、滞在費は持つという東洋的な発想もわからなくはありませんが、先方の会長が来日した際に、こちらの学会が滞在費を持つのも面倒と考えました。

アメリカの場合には、先方の学会創立50周年の年次大会がボストンで開かれた際に7ヵ国と協定を結ぶ儀式に呼ばれました。勿論、旅費と宿泊費は、当方の個人持ちです。朝食会の後に各国がお祝いを述べ、順番にサインしては写真を撮るというものでした。

WCNDTがブラジルで開かれた時にも、ブラジルとの協定の審議が終わっていないのに、来ている各国と協定を結ぶという儀式があり、日本にも協定の署名に参加してくれとしつつこく頼まれましたが、理事会を通っていないとの理由で断り、儀式を傍観しました。

協定の文章も初めてのことで、気を遣いました。韓国の原文には、妙に細かいことがあったりしたので、電子情報通信学会から日本電気の弁護士に見て貰ったという案を頂き、精神的な協定のみで、細かいことは事務局どうして取り決めるとあるのを採用し、韓国も台湾も本文を同じ内容にしました。

方針としては、何処とも同じ内容にしておき、別に細目を詰める方式としないと、理事会で時間が掛り、取り敢えず、協定を結ぶという訳には行きません。その後、中国からもいろいろな内容で協定を結びたいと言って来ましたが、韓国と台湾とはこれで結んだので、この文章ならば結構ですと返事したところ、台湾との関係等から任期中には返事がなく、それで済みま

した。アメリカの場合には、7ヵ国となる前に、やり取りを行い、本文を簡潔にさせ、各国とも同文となりました。

付属書の具体的なことはもう少し深入りする必要がありました。例えば、両国とも検査技師の認定事業を行い、そのための教科書や問題集を作ったりして、大きな財源としていますが、教科書の内容や問題等は、国際的にレベル合わせをするために、相互に利用するための条件等を、協定を結んだ機会に詰めておきたいと考えました。これも、先方の事務局長が辞めたり、日本側の事務局の能力不足から沙汰止みとなっていました。数年前にアメリカと協定を結んだ結果が、今年の6月にハワイで開かれる日米のシンポジウムでやっと初めての実を結びます。

3.8 日韓共同研究

韓国との間で、国際共同研究EMSEA (Environmental Monitoring from Space of East Asia) を91年から行っています。KAISTのChoi先生からリモートセンシング関係の共同研究を行いたいという提案が日本学術振興会にあり、日本側の代表になることになりました。

Choi先生は、JPLにずっとおられたのを呼び返されて、逋信大臣、KAISTの学長、ETRIの所長、日本の学術振興会に相当するKOSEFの理事長等を歴任された実力者です。KAISTの衛星センターの所長として、KIT-SATというCCDを搭載した小型衛星を開発され、現在3号機を準備されています。衛星を使ったりリモートセンシングを振興したいとのことで、まず、日韓のシンポジウムを開くことにしました。その際に、継続したプロジェクトにしようということになって、覚書を交わし、EMSEAが発足しました。

以後、毎年韓国でシンポジウムを開いております。日本側は、旅費の関係から十数人を派遣していますが、韓国側は、韓国リモートセンシング学会の秋季年次大会も参加して、年々規模が大きくなって来ています。

日本側の研究者は特定研究や重点領域研究でお互いに知っている人を連れて行っていますが、韓国側では、今までバラバラだったのに、このプロジェクトによりお互いに交流するようになり、研究者の層が厚くなったという利点が生れました。

また、Choi先生が小生の所で衛星を直接受信してデータを配付しているのを見て、韓国にはそれが不足していることに気付かれ、精力的に運動され、処理設備の導入、受信の交渉をされ、SPOTを受信されますが、最近やっとNASDAと覚書を交わし、J-ERS、

MOSの受信をされることになりました。

NASDAが外国の宇宙機関以外に受信を許可するのは初めてであったため難色を示しましたが、Choi先生の熱意と齋藤成文先生のご尽力により実現しました。

KAISTにリモートセンシング研究所も作られたので、今までの共同研究の受信データを使った日韓共同研究を立上げのお手伝いしなければなりません。

4. テレビジョン学会の国際交流

本学会でも、国際化への提言がなされ、事業企画委員会でも、検討が行われています。今までの経験から特に国際会議について私見を述べて見たいと思います。

大国際会議を考えるよりも、まず、小さいワークショップ、中規模のシンポジウム等を多数企画し、気軽に実行することが必要です。その意味では、3月に開かれる日韓のNew Video Media Technologyのワークショップが良い例かと思います。

なおそのためには、次の条件が必要となります。

- ・金を掛けない。豪華なものとしめない（会場、パーティ）。
- ・招待者は、極力少なくする。有名人を呼ばなければならないような情けないものは企画しない。MVAの経験では、ごく僅かな旅費で喜んでやって来る。
- ・地方都市が国際会議を開きたがっているので、便乗する。地方自治体から補助金が出る。その反面、ローカルアレンジメントができる会員が現地に必要な。関東地区に会員が集中しているので、機関が旅費を出さないため、地方では集客が難しい。そこで、内容はあるが、地味な金を掛けない企画とし、それに出ないと時代に取り残されるようなテーマとする。同時通訳は一切雇わない。地方のため外国からのアクセス（成田→羽田）が問題となるならば、ソウルとの便がある地方都市で開けば良い。
- ・事務の外部委託をしない。オーバーヘッドが大きい。意欲のあるボランティアが必要。細かい事務や経理を誰が引き受けるかが問題であるが、アルバイトでもできる。学会で行うと人手が必要。
- ・実行委員会等の会議は、できるだけ少なくし、責任者を決めて任せる。時間と費用を節約する。e-mailで連絡しあえば会合は、余り要らない。
- ・若い人を実行委員長として登用し、活性化を計る。
- ・小さくても斬新なトピックを選び、継続して開く。
- ・各研究会に提案を求める。国際ワークショップを企画できないような研究会はあまり先端的でない。
- ・会議開催のための融資制度を作る。企画時に必要経

費を融資する緩やかなガイドラインを作る必要がある。

- ・独立採算で企画する。予算の審議を行い、学会の財政負担となるおそれのある国際会議は認可しない。独立採算で企画したうえで、できれば予算にながしかの黒字を計上し、学会に入れる。または、次回開催の準備金とする。
  - ・原則として寄付に頼らない。
  - ・no show paperを防ぐため、発表者には事前登録を義務付ける。
  - ・懇親会費は、若い人に参加して貰うため、登録費に含める。
  - ・DMのデータベースを整備することが重要。
  - ・学会のホームページで海外に知らせる。
  - ・論文集を作る。大学関係では、国際会議は、研究会より評価される業績となる。
  - ・採択率は、参加者を増やす意味では高くしたいが、余り高くすると質が下がる。アメリカのCVや画像処理関係のように、25%の低い採択率では成立たない。
  - ・ネットワークを活用し、発表申込、アブストラクトの送信、論文集の原稿送信、参加登録などを行う。電子送稿により、論文集の版下がすぐできる。
  - ・熱意のあるボランティアを見つけることが第一条件。小さいものならば一人でもできる。その人を中心とした少人数でチームワークの良い運営をする。
- 以上、思いつくままに勝手なことを書きましたが、ご参考になれば幸いです。

たかぎ みきお
高木 幹雄 1960年、東京大学工学部電気科卒業。1965年、同大学大学院博士課程修了。同年、同大学生産技術研究所助教授。1979年、同大学教授。現在、概念情報工学研究センター所属。1971年～1972年、カリフォルニア大学（サンタバーバラ）研究員。1984年、テレビジョン学会丹羽・高柳賞業績賞。1991年、電子情報通信学会業績賞。画像処理の研究などに従事。正会員。現テレビジョン学会会長。

1994年5月号から約2年間にわたり連載して参りました「国際交流ノート（全23回）」のシリーズは、本号をもって終了させていただきます。ご愛読ありがとうございました。

次号からは「ものを作るこころ」のシリーズが始まりますので、引き続きご愛読下さい。

編集長 元木紀雄